

第3分科会

分科会名

α × 地縁組織

= 多様な連携で生み出す新しい風

協議の柱

個人の想いや『この指とまれ』式の活動が周囲の共感を集め、多様な繋がりを生んでいます。そのような活動がどのようなプロセスを経て実現されてきたのかを話し合い、住民一人ひとりの“やりたい”をカタチにできる、新たな地域づくりについて考えます。

1 当日までの分科会運営委員会等での議論

地域のために何かできることはないか。自身の住む地域の良さをどのようにして広く知ってもらえるか。廃れてしまったかつての地区シンボルを使って地区を盛りあげられないか。地域の中には、さまざまな思いを持った住民が多くいます。

これまでの地域の在り方では、なかなか新たな繋がり・活動が生まれにくい中で、地域に新しい風を巻き起こすには、新しい視点・地域への想いを抱いている方の活動が必要なのではないか。そして、その活動に地域が共感し、共に創り上げていくことで、より一層新しい地域づくりに繋がっていくのではないかと考えました。

2 分科会の進め方

はじめに、3つの事例発表を行います。その後、当日までの議論の結果見えてきた、「個人の想いや、『この指とまれ』式の活動が、地域（地縁組織等）にどのように作用し新たな地域づくりが生まれたのか」に焦点を当て、当日参加者とグループに分かれ議論を深めます。最後にグループごと議論した内容について発表を行い、全体で共有します。

コーディネーター

松本大学教育学部学校教育学科 准教授

大蔵 真由美 氏

プロフィール

2017年東海学院大学短期大学部幼児教育学科講師、2019年より現職。専門は教育学、社会教育学。教育学や地域活動に関わる講義を担当。研究室では大学と地域との連携として、松本市内における次世代育成の活動に参加している。

報告者

ゆいま～る子ども食堂 主催者

藤森 俊昭 氏

プロフィール

1966年生まれ。約30年の会社勤務を経た後、2019年に「沖縄クラフト&カフェちゅらね」を島立地区に開業する。同店を経営する傍ら、市内で沖縄民謡のボランティアコンサートを17年にわたって行っている。2020年4月からは、子どもの居場所づくり支援として「ゆいま～る子ども食堂」を開始する。コロナ禍にありながらも、地域機関との協働によって今日まで地区の子どもたちに学習支援・食事・あそびの提供を進めている。

報告者

松原モールぷろじえくと 代表

新保 俊尚 氏

プロフィール

1960年新潟県生まれ。セイコーエプソン(株)でインクジェットプリンターのヘッド技術業務に携わり、定年後も雇用更新で引き続きヘッド技術業務に従事中。平成元年松原地区に転居し、松原在住32年になる。平成30年に、松原をこよなく愛する有志3名で、松原モールぷろじえくとの活動をスタート。令和2年秋には、地域の方々の技術を集結し、不可能と思われていた、からくり時計を自分たちの手で修復し、松原モールのシンボルである時計台が復活した。

報告者

松本市中山公民館 館長

鈴木 幹夫 氏

プロフィール

1956年三重県生まれ。日本福祉大学2部在学中より名古屋市内の学童保育指導員として働いていたが、32歳のとき、松本に転居。技術専門校で木工技術を習得し、家具製作工房開設、その後60歳まで続ける。若い時から歌の創作・演奏活動を続け、松本で立ち上げた歌のグループ「ぽこ・あ・ぽこ」は今年28年目を迎え、全国各地で演奏活動。館長4年目。

「ゆいま～る子ども食堂」

ゆいま～る子ども食堂
主催者 藤森 俊昭

1 ゆいま～る子ども食堂とは

(1) 「ゆいま～る」ってどんな意味？

沖縄の言葉で「一緒に頑張ろう」「助け合い」という意味です。

「地域で子どもを見守る居場所づくり」に主眼を置いて活動している。

(2) 活動のポイントは？

ア 子どもたち（想いは小学生～高校生）が学校帰りに立ち寄って自由に時間を過ごすことができる空間。

イ 地域の人たちと交流し、地域全体で子どもたちを見守る場所。

ウ クラフトショップ経営の主催者がものづくりの楽しさを子どもたちに体験してもらう時間。

エ コロナ禍で食事の提供ができない状況で、子ども食堂のお弁当を囲んで一家団欒の時間を持ってほしい。

2 結いま～る（助け合い）で立ち上がった子ども食堂

(1) 主催者の想い

松本市外在住であるが、店舗所在地の島立地区に何らかの貢献をしていきたい。

また、地域で子どもたちの成長を見守る子ども食堂を開きたい。

しかし、店舗オープンして日が浅く地域のつながりが少ないため、どこに協力もらえばよいかわからないのが悩み。

(2) 公民館の協力による悩みの解決

ア 配布された島立地域だよりを見て、福祉ひろばに地域の協力について相談して、すぐに公民館長、公民館主事、福祉ひろばの方々との打ち合わせを設定してもらった。

イ 子ども食堂の主旨や島立に全く地縁のないことなどの悩みを相談したところ、皆さんの協力で4月から開催することになった。（公民館が学校への開催チラシ配布や島立地域だよりへの掲載）

また、公民館の紹介で松本大学による学習支援などの大学の協力も得られることに。

ウ 自店舗開催でスタートしたが店舗が通学区の北端にあるため、初回利用者は10名程度でした。

エ 公民館主事と再度話し合い、子どもが利用しやすいように小学校に隣接の公民館で6月から開催。

オ 松本大学の学生による学習支援や地域の方によるお弁当作りのボランティアも開始。

カ ボランティアの方は地域に詳しい公民館や福祉ひろばの方に依頼してもらっている。

キ コロナ感染拡大期には公民館を使用した活動は中止に。主催者所有のキッチンカーでお弁当配布。

(3) 公民館の想いを子ども食堂と協働して実現

地域活動の新たな取り組みとして、ノウハウのあるNPO ホットライン信州の協力で島立公民館、ゆいま～る子ども食堂共催でフードドライブを実施。

初回にもかかわらず地域の方から多くの寄付を持ち寄っていただいた。

3 子ども食堂の様子、そしてこれから

(1) 開催してきた子ども食堂

月一回の定期開催（2021年4月～2022年1月まで10回開催。）

コロナ感染拡大期はキッチンカーによるお弁当配布のみを行った。（8月、9月、1月）

特に1月は活動の主旨に賛同してくれたキッチンカー1台が初参加。



公民館の広い会場を借りて開催



ものづくりの体験
一番人気だった糸かけマンダラなど



フードドライブ
多くの食品を寄付いただきました
(約200点 300kg)



ボランティアの方と一緒に
お弁当づくり



新型コロナウイルス感染拡大時にはキッチンカーでお弁当配布

(2) これからの活動

- ア 島立地区内で持続可能な（子どもの）居場所づくりを目指したい。
- イ 小学生、中学生、高校生、そして地域の大人の居場所になると嬉しい
- ウ 個の活動から地域の活動へ発展させていきたい
- エ 地域の理解、ボランティアの確保が課題

「松原モールぷろじえくと」

サブテーマ

地域の宝を再発見！自分たちの力、地域の力で魅力ある街づくりに取り組もう！
子どもたちの思い出に残る、戻ってきたいと思える街づくりをしよう！

松原モールぷろじえくと
代表 新保 俊尚

1 事業の概要

(1) 事業の背景

平成27年から、松原地区の長期的な地域づくりと松原モールの活性化を目指して活動を開始した「まつばら未来会議」であったが、平成28年の春以降活動を停止していた。そんな中、地区住民の中で松原地区にあって地区住民が楽しめる場所として活用されていない松原モールで何かイベントを開催したいとの動きがあり、「まつばら未来会議」の構成員であった3名や公民館主事、館長が中心となり、それを支援する活動「松原モールぷろじえくと」が平成30年の11月に始まった。

(2) 事業の目的

ア 松原地区の中長期の目指す姿を検討し実施するグループ活動を目指す。

イ 松原地区の重要コンテンツである「松原モール」を美しい状態で活性化することで、地区住民の地域愛を深化させ、それを維持し進化させながらお互いの絆を深める。

ウ 短期的な活動目標

(ア) 松原モールを美しい状態で維持するため定期的な美化活動を行う

(イ) 定期的の時計台コンサートを開催し、募金を集め修理費用の一部とする

(ウ) 平成10年の火災で壊れたままになっている時計台の「からくり人形」を地域住民が主体となって修復する

(3) 具体的な取り組みの内容

ア 美化活動

松原地区の環境衛生部では松原モールの除草作業が問題になっていた。モールの敷地は、インターロッキングで舗装されており、目地の除草は難しく地区の定期的な一斉清掃だけでは対処できなくなっていた。環境衛生部では、地区町会連合会の了承を得て、除草剤で対処する方針を打ち出していたが、除草剤の安全性について改めて問題視する声が上がって実施できなくなった。そこで、環境衛生部と松原モールぷろじえくとが共同して、ボランティアによるモールの美化作業を開始した。

イ 時計台イルミネーション

クリスマスシーズンに松原モールの時計台と通路を電飾とキャンドルで飾り付け、みんなと楽しく過ごすイベント「一夜限りの時計台イルミネーション」を実施することにし、応援者を募りながら活動を開始した。

ウ 時計台修復活動

メーカーへの依頼では、経費が掛かりすぎるため、自分たちの手で修復しようとモール美化活動のメンバーが立ち上がり、地区のボランティアの方々の協力も得て修復活動を推進した。

2 話し合い判断し行動に移したプロセス

(1) 事業を始めようと思ったきっかけ

松原モールという他の地区にはない資源を地域活性化に役立てたい。「昔は時計台も動いていて見に来た覚えがあるのに、壊れたままで残念だ」という思いが地区のみんなの心の中にあった。

(2) 行動に移すまでの過程

「まつばら未来会議」の構成員であった3名や公民館主事、館長が平成30年11月、まずはクリスマスも近いし、初めての試みとして時計台をイルミネーションで飾り、人を集め松原モールの価値に気づいてもらう一歩を踏み出した。合わせて、からくり時計が壊れたままになっていることを再認識してもらい、修理への機運を醸成した。

(3) 他との協力・連携・協働などをどのように実現したか。

毎週土曜日朝のモールの清掃活動を地道に行い、その姿を認識してもらうことで協力への機運を高めた。モールの各種イベントにボランティアとして手伝ってくれそうな人への声かけと共に、イベント後の協力者との打ち上げは欠かさなかった。

(4) 実践する上での工夫

- ア 具体的な活動内容を決めずに、話し合い（ワークショップ）を先行させ中断してしまった「まつばら未来会議」の反省を踏まえ、まずは議論を重ねることで具体的な活動目標を定め、実行することを優先した。
- イ 美化活動の仲間づくりに関しては、地域住民に作業を割り当てたり、強引に勧誘したりはせず、ぷろじえくとメンバーが継続的に作業をすることでその姿に共感し参加してくれることを目指した。

3 成果・課題と今後の展望

(1) 成果

- ア 毎週末に行っているモールの美化作業は、常連もしくは不定期での参加者が加わったほか、某高校のOB会がボランティア活動の一環として月1回参加してくれるようになった。
- イ からくり時計の修理を目標にした「時計台コンサート」は多くの住民の共感を得ることが出来、発足時以外のメンバーが数名であるが準備から協力してくれるようになった。また、コンサートでの寄付金と有料の飲み物での利益を着実に積み立てることができた。
- ウ 当初メーカーの修理見積りで1千万円以上かかるため、いつになったら目標の募金額に届くのか見当がつかず、修理は不可能と思っていたが、清掃ボランティアに参加してくださるメンバーの中に、本格的にからくり時計の修復に取り組んでくれる技術者がいて、その他のメンバーの協力をもらいながら、約半年の時間をかけ、本当に必要なパーツのみを購入するだけで、メーカー見積もりに比べ各段に安い費用で、令和2年秋にからくり時計を修復することができた。
令和2年秋に、全国のからくり時計ファンも来て、地元小中学校の吹奏楽部の演奏により新型コロナ感染拡大に注意しながら、すばらしい始動式を行うことができた。その後からくり時計を見るために、小さい子を連れた親子や幼稚園、保育園などが、からくりが動く時刻に合わせてお散歩で来てくれるようになった。

(2) 今後の課題

- ア 時計台コンサートも美化活動も協力者が増えたとはいえ、まだまだ不十分であり、さらに協力者を増やすアクションが必要である。
- イ からくり時計の修理に関しては、真の目的は修理ではなく、修理作業を地域住民がどのように協力して、課題を解決しながら実現していくかというプロセスが重要であり、それにより地域住民の絆を創造していくことにある。
- ウ からくり時計の修復は終わったが、定期的なメンテナンスも必要であり、このからくり時計を中心に各種イベントを開催し、地域を盛り上げるように考えているが、新型コロナ感染拡大防止との両立が難しく、昨年も2回しかコンサートを開催できなかった。新型コロナ感染拡大を防止しながら、どのように地域活性化のイベントを開催していくかが当面の最大の課題である。

「2021 なかやま体験フェスタ」

中山公民館
館長 鈴木 幹夫

1 背景にある地域の現状・課題

(1) 中山地区の概況

ア 人口 3,195名 世帯数 1,360世帯 (R4.1.1現在)

イ 高齢化率 41.0% (R3.12.1時点)

(2) 地域が抱える課題

平成26年9月に「中山地区地域づくり協議会」が設立され、同28年6月に協議会の基本計画が策定されました。その中で地区の課題として、①少子化、②高齢化、③人口減少の3点が挙げられ、課題解決のため目指す方向として、住民が「住み続けたい」、「住んで良かった」と思える、また地区外の住民も「訪ねてみたい」、「住んでみたい」と思える地域づくり (= 『住んで良かったと思える中山づくり』) が必要であることが示されました。

(3) 事業が始まった経緯

この方向性を受け、地域づくり協議会内に「地域活性化部会」、「防災・環境保全対策部会」、「福祉対策部会」の3部会を設置しました。「地域活性化部会」は、地域の特性を生かし、和やかで活力ある地域づくりを、「福祉対策部会」は、共に支え・助け合い、安心して健康で心豊かに暮らせる地域づくりを、「防災・環境保全対策部会」は、安全で安心して暮らせる美しい地域づくりをそれぞれスローガンとし、各部会は事業を開始しました。

「地域活性化部会」では、具体的な事業として地区内の遊休農地の活用として、加工トマト、エゴマ、花豆の栽培を行う「元気づくり事業」、また火、金の週2回公民館の談話スペースを活用した「公民館カフェ」などをはじめ、地区内外の交流人口の増加に努めてきました。

そうした中、「地域活性化部会」では、更なる交流人口の増加のため、地区外に向けて地区のお店、団体・サークル、特産品、地区で活動する人材などを紹介するカタログを作成しました。なお、このカタログは令和元年度の長野県地域発元気づくり支援金を活用しました。

カタログ作成時に、地区内の人材や農業体験、自然体験、ものづくり等の様々なアクティビティを掘り起こしたことで、これを同時期に地区外の方に向けて一斉に行う、体験型ワークショップのイベントとして「なかやま体験フェスタ」(当初は「なかやま体験博覧会」という仮称でした)が企画されました。

2 事業の実践内容

(1) 事業のねらい

上記経緯のとおり、「なかやま体験フェスタ」は、地区外の方と地区内の方との交流人口の増加のため企画されました。しかしながら、令和2年度、令和3年度と新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、それぞれ実施には至っておりません。

(2) 具体的な取り組みの内容

令和2年度はもともと秋の行楽シーズンに合わせて、複数の日程で開催する予定でしたが、新型コロナ禍で当時ワクチン接種も滞っていない状況であったことから、令和2年8月のプロジェクトメンバー会議にて、開催中止を決定しました。

続く令和3年度は9月5日(日)の1日みの開催予定とし、地区住民が講師となるプログラムを用意し、オンラインで予約できるQRコード付きのチラシを作成しました。8月7日(土)から予約の受付を開始し、各プログラムに複数件の予約が入り、あとは実施を待つばかりの状況でしたが、盆明け後感染者数が急増し、感染警戒レベルが5

となったこと、またプログラムに参加するのは地区内外の当時はワクチン未接種の子どもたちが中心であったため、感染拡大を避けるためフェスタ直前の8月27日の担当者会議のなかで中止を決定しました。

〈予定していたプログラム〉

- ア 歌声喫茶
「久しぶりにみんなで歌い、一体感を味わいましょうよ！」
- イ 焙煎コーヒー
「本格コーヒーを味わいながら静かにライブを楽しむオトナの時間」
- ウ ツリークライミング
「自分の力で高い木に登れば違う自分と景色が見えるぞ！」
- エ 喜源治の広場で遊ぼう&薪・飾り炭作り体験
「PCゲームより面白い遊びがあるよ！とにかくやってみないかい？」
- オ わら細工
「日本人は藁（わら）でいろいろなものをつくってきたんだね」
- カ 松本市考古博物館
「縄文時代が見えてくる 古代ロマンの旅に」
- キ 椅子づくり・鉋で削ろう体験
「時には自分でつくってみるのも大事だよ！」
- ク 里山ヨガ体験
「緑のオーラに包まれてどどん体が自由になるよ！」
- ケ 中山太鼓連
「腹に響く和太鼓たたくと 無心になるよ！ホントだよ」
- コ 物産販売
「中山産の美味しい野菜や加工品いかがですかー！」
- サ 中山文庫での読み聞かせ

3 今後の展望

令和2年度、令和3年度ともに実施に至っていないため、実施した上での今後の展望について記載できることはありませんが、少なくとも準備段階で多くの地区住民、団体、サークルの皆さんがプログラムづくりをはじめ本イベント、ひいては中山地区の活性化のために大いに協力してくれました。

これは翻って考えると、地区住民の皆さん一人一人が、冒頭に掲げた地区の課題である「少子化」、「高齢化」、「人口減少」について、我が事として真剣に捉え、今後の先行きを行政にのみ任せるのではなく、出来ることを自ら行うという住民自治の表れでもあると考えられます。

本イベントに限らず、今後も中山地区の活性化のため、引き続き地域住民が一丸となって活動を続けて参ります。